

## 太平洋戦争従軍回想録

鳥取県 岩 本 定 夫

昭和十二年七月七日支那軍の蘆溝橋での不法射撃の銃声一発により端を發した北支事変、日本の不拡大方針にもかかわらず排日排貨運動が日ごとにつのり、支那事変となり、戦線は支那（現中国）全土に拡げられた。

私は以西村役場に勤務（書記）していた。以西村での召集令状を受けたのは昭和十二年七月十五日夜、十二時頃役場にて大丈の橋本万次郎氏宛のもの一通を八橋警察署の急使より受領（同日昼頃予報ありて山川の那須伊勢雄と役場に待機していた）、直ちに自転車で走り、夜中たたき起こして渡し、受領書を貰い帰った。村内全般にわたり騒然となる。

第二回目は同年七月二十七日夜（赤碓の荒神さんの夜宮の夜）、八時同じく急使により四〇余通の（第六

動員）令状が届けられた（父彦藏が急使請負人となっていた）。直ちに手近な人を呼び令状を配付、村内いよいよ蜂の巣をついた様相となった。

応召兵出發に際しては、村長は元より在郷軍人会をはじめ各種団体が小学校庭に集合し、送別式（村長、各種団体長送別の辞、応召兵謝辞）、餞別金（以西村より五円）を渡し、赤碓駅頭まで歓呼の声で見送りをした。

（因みに当国実よりは川上福光氏、前田太市氏、山根米藏氏の三人）

一般村民は神社参拝（一二社参り、一〇〇社参り）をし武運の長久を祈る。千人針の腹巻、寄せ書（昭和十六年十二月八日米英に対し宣戦布告、太平洋戦争となる）。以来、役場に勤務、昭和十七年十二月八日以西村収入役に選任され張り切って執務、それまで召集令達の回数はおよそ数十回と記憶。

昭和十八年四月十八日、午後令状四通受けたが、その中の一人となった（三十二歳）。来るべきものがついに来たかと思つた。直ちに事務整理、四月二十五日、

後任者に引継ぎ退任届を提出し退職した。

専ら親戚廻り、神社参拝、動員令があった日から一日後の四月三十日、日本男子と生れた者の日頃の熱望がここに達せられた喜びとともに、また、暗涙のひそかに襟を濡すことがなくていられようか。丈夫涙なきに非ず。されど別離の間に濺がずとか。無論今さら恋々として家を顧み、後に心が残るではなかったが、これが親子兄弟の今生の見納めになるかと思えば、鬼の目にも涙のたとへ、眼底涙の湧くを禁ずることは出来なかつた。女々しいと思えば笑えである。

出発の前夜の二十九日、旧友の写真を出して見たり、机の中を片付けたたり、死んでも後で遺族の者に何一つ判らぬことがないようにそれぞれ整理して、子等の寝顔をのぞき見て、住み馴れた家の畳の上での最後の眠りを求めるべく寢床に就いた。

暫しまどろみし程に、鶏鳴曉を報じ、スワと飛び起き、清水で身を清め、清衣を着飾り、最後の礼拝を先祖代々の仏前に捧げた時、全身冷水を浴びたようであった。

「後のことは少しも心配するな、しつかりやれ」  
「私のことは決してご心配下さいますな御身御大切に」かくのごときはただ私のみでか。今日応召する家で、ほとんど同時に、親子、妻子、兄弟の永別に臨んで繰り返えされる悲壮な言葉であつたであろう。

四月三十日出発（応召兵出発に当り、初めは送別式のため駅まで見送りしたが、後は防諜上中止となる）。国実の村はずれまで部落の人の見送りを受け、それ以後は近親の者と駅で別れ、鳥取市の旅館に一泊、五月一日午前八時、鳥取中部第四七部隊の営門をくぐり、応召兵たまり場に一同集合し待つ。八時三十分いよいよ入隊受領員の呼び声にて各中隊に分かれた。

小生は「フキ岩本定夫」と呼ばれたが何のことやらわからず、こちらに並べと言われて整列。よく聞けば第二機関銃中隊のこと（中隊長下田中尉）、第六内務班員となつた。班内には各人ごとに寝台の上に被服から手箱にいたるまで名札がつけてきちんと準備してあつた、直ちに軍服に着替え、私物は留守宅へ發送準備。班長浜野軍曹の案内で便所、洗面、洗濯場、物干場、

炊事場、彈薬庫などを見て廻り昼食。

食事の準備も教育補助員角田上等兵（倉吉市国府出身、自分の隣の寝台の人）の指導で飯汁等のつけもりをして一斉に食事。午後は中隊長のいろいろの話を聞き、夜は寝床のとりかた、内務班でしていけないこと、してもよいことなど正に小学校一年生が入学した日に教わるそのものごとく煙草（「ほまれ」両切です）口が添えてある二〇本入りで七銭、地方ではバット一〇本入り七銭）の配付を受け火をつけた。班内煙幕を張ったごとく一同くつろぎ雑談十時、消灯ラップパで床に就いた。

床に入ったものの頭は走馬灯のごとく、なかなか眠れない。いつやらうとうとと眠った。朝、東がしらみかけたら、皆が便所に行ったり、ごそごそしていたら起床ラップパまでは起きてはいけないといわれてまた寝床に。

六時、起床ラップパが鳴るや飛び起き、軍服を来て寝具（毛布、枕）の整理、舎前に整列点呼、二大隊の兵舎かけ足二周、帰って朝食。

八時三十分演習整理、教官服部見習士官、助教浜野軍曹、助手角田上等兵、しばらくは営庭にて重機の名称、分解、結合、手入方法、分解搬送要領など当てられた銃番号一二〇六。十二時昼食、十三時三十分演習整理。十六時帰営。十七時夕食（入隊後暫くは夜、典範令の学科あり）。軍歌練習整理、学科、中隊長の精神訓話等。一〇時消灯。当分の間以上の日課の繰り返し。

七月中旬、日本原（岡山県）にて一期の検閲あり。往路は汽車輸送、帰りは徒步行軍。銃を馱載し小休止となれば先づ銃を降ろし、水飼い、そっこう（馬の足をこする）。重機隊は小銃隊と違い、小休止の命令があつても、すぐ休息に入ることではできない、出発準備となる。

検閲後は午前、午後の演習はなく専ら使役（雑作業）等。支給されている被服の下装分は中古品にて演習より帰って見れば、破れ汚れているので修理（大破れは工場修理に出す）、洗濯（石鹼配付少なく不足）、環境の整理。

日曜の外出には上装被服着用、徒手帯剣、巻脚絆、水筒携行、八時舎前に整列。週番下士官の検査を受け出発。鳥取市内にて喫茶店、映画、市内ぶらぶら。何時でも上官に出会えば敬礼、欠礼すれば大変、初年兵は外出しても敬礼演習のようなり。暑くてもホック、ボタン一つはずすこと許されず、汗だくなく早々帰って洗濯。日曜でもめったに外出せず、班内にて寝台に寝ころんで戦友と雑談、被服の洗濯、個人修理、酒保にコーヒー等買食い。家からの便りを読んだり、書いたり、使役に出たり。

八月八日、四男幸男（満一歳）死亡により外泊許可ありて帰宅し葬送する。八月中旬、同年兵一部の召集解除あり、われら残留組はくやしがあったが、いたしかたなく勤務。九月十日午後五時、鳥取大地震が起る。本部第四事務室二階にてガリ版用原紙切りの勤務が終わり、帰る準備中大揺れとなる。正に小舟に乗ったごとく、起立不能、机の下にもぐり込み待つこと数分間、小揺れとなり、直ちに自班に帰ってみれば整頓棚の手箱、被服皆ひっくり返り、だれのものか判らぬように

散乱していた（当日第二大隊は浜坂砂丘に演習に行っていたが砂丘にても立っておれなかったという）。

市内は火災が発生し赤々と天をこがすごとく、消火作業は全く不能にて焼けるにまかせ、二日間燃え続け、正に焦熱地獄と化し、旅館、商店等倒壊家屋八〇%、交通麻痺、死傷者多数出た。

第四十七部隊では、建物はポートで多く繋いであったせいか家屋の倒壊はなかったが、屋根瓦は皆ずり下がり、雨が降れば雨が漏り、居場所がないようになった。炊事場の釜が故障となり全員飯盒炊さん、くみ取り人夫が来ないので便所はあふれだし兵隊でし尿処理。三日目から部隊の大部分市街に出動し、倒れた家屋の一部ロープを付けて引張り道あげ作業。先づ交通を確保し救援物資の搬入等の後援をした。

九月十一日、第四十七部隊で陸軍士官学校の入試があり、弟「弘」は湯上り着姿で受験に来ていた、前日（十日）鳥取市に来て旅館で入浴し、二階の縁側で涼ずんでいたら地震となり、二階より飛び降り難をのがれ、着のみ着のまま受験し、帰りは因美線経由で帰

った。

九月十六日午後、週番上等兵が「今から呼ぶものは、すぐ事務室に來い」という。六班で一〇名の中の者となった。事務室では下青木准尉が「おまえらはすぐ外泊の準備し、十分後に舍前に整列せよ」との命令。いよいよ野戦命令と直感、私物を厩当番兵に頼み裏門横の松生垣より出してもらい（外泊時には服装検査あり）市内に出たが、汽車が不通にてあちこち、トラックの荷物の上に載せてもらい浜村駅にて、ようやく最終列車に乗り、徒歩で夜中十二時頃自宅に着いた。

家の者はびっくりした。野戦行とはいわなかったが皆が察していた。帰営時には浜村駅で絹見同年兵（羽合町出身）と線路づたいでようやく帰営時刻に間に合った。

野戦行の装備を受領、九月二十日夜鳥取駅乗車、因美線で姫路に一泊、公会堂で慰安演芸を見た。山陽線を下り、途中大雨ありて列車不通となり半日位停車。現地婦人会等の炊き出しの握り飯の接待を受け（はがきを書き無検査投函を依頼）。

下関より釜山、釜山より代用貨車（貨物車）にアンペラを敷き、用便は外に向けてやり、昼夜の別なく走り続け、朝鮮を縦走し鴨緑江を渡り、北支、中支、浦口で汽車を下り、揚子江を舟で南京に一泊し、再び汽車で上海の高畑兵舎に入った。

毎日、南方行の準備（ジャングル行進方、敵襲時の避難方、装具の受領等）で十日間を過ごした（その中一日、引率外出で映画を見たり、一日は実弾射撃訓練）。

昭和十八年十月十二日、呉淞より第五中隊（荒木隊）と巡洋艦「多摩」に乗り出港、目的地は不明だが南方面だということは、渡された装具で判断。国民村民見送りの方々の万歳の声が、なほ遠く近く耳朶にひびくごとく感じられ、戦場を夢想しつつ、我らを乗せた船は南へ南へと進み、いづれの方面に行くのか輸送指揮官と船長の外には誰一人として知り得なかつたのである。

南下北上いずれの所に向わんとも我等には何ぞ関することぞ。ただ満身の勇気を發揮するのみ、僚艦「木曾」と共に昼夜の別無く全速力で蛇行進行。二日程は

船酔いで食事も半分位がとれなかったが次第に馴れてきた。艦内は暑いので夜は毛布一枚持って甲板上に出て星を眺めて、戦友といろいろ郷里、家族のこと、身の上話の繰り返した。四方が水平線での方向に進むのか全く判らぬ。

八日目トラック島に半日停泊。連合艦隊の山のような軍艦を見て、幾らか安堵感を持ち、一日後(九日目)夜、甲板上にて流星を眺めていたら、海兵さんの「空襲だ陸兵は邪魔になるから早く艦内に帰れ」と伝えられ、与えられている室にて装具全部体に付け、小銃弾を持ち救命胴衣をつけ何時でも海中に飛び込む態勢にて待つこと約二時間。

その間、海兵の空襲に対し機関砲にての応戦の物凄い音、艦内は蒸し暑く流汗だくだく、タオルはしほれるごとし。ようやく空襲解除となり装具解き汗が引いた。

〔僚艦「木曾」の煙突中に爆弾が落下し、機関の一部故障のため全速不能となり、一日遅れてラバウルに入港した〕

十月二十一日ビスマーク諸島、ニューブリテン島ラバウルに入港上陸した。

焼けつくような暑さのため椰子の葉陰に入れば、実が何時落下するやも知れないからと注意され、赤道直下の太陽に曝され待機すること一時間後、それぞれ草葎き竹張り草敷き兵舎に入った。

熱帯につきものの蚊が多いので、蚊よけに煙を出せば敵哨戒機に発見されるし、とまどっていた(当時ラバウル港内には海軍水上機(下駄ばき)二、三機浮上していた。向こう側には陸軍の飛行場があり、空襲時には飛び立ち撃退しつつあり)

二、三日後前進命令にて糧秣(白米は白い布袋に入っていた)、弾薬を海岸に集積していたら空爆により散乱、数日後再び準備を整え出港、目的地へ到着時に敵機による照明弾投下に遭い一瞬真昼のごとくなり、トンボ帰りて、ラバウル港に引き返した。

数日後(三回目)、駆逐艦によりイボギに到着。信号連絡により上陸用舟艇が艦側に接するや先づ兵器を投下、兵員が飛び込み、間髪を入れず発進、水深一メ

トトル地点にて下船し、足先でさぐりながら進み、本隊は直ちに前進した。しかしわれら一五名は軽部少尉を長としてイボキ整備隊として残留することとなった。

毎日海岸警備、二人ずつ動哨勤務。視界に敵の哨戒機二機ずつ見えざることなし。ラバウルは南方の主要基地にて弾薬、糧秣が相当量壕内外に集積しありたるも一部の糧秣は海岸に、米は込入りのまま野積み、雨に濡れるがままにてカビの付いているものもある。また新調の自転車（ノーリツ号）約一〇〇台露天に雨ざらし、調味品は大体缶入り、梅干は樽に、野菜（千切大根、キャベツ、玉葱、小松菜、白菜、氷豆腐、ジャガイモ等）は乾燥し二〇キロの缶入りとなっていた。われらが上陸時には兵力一〇〇万、車両（主にトラック）一万台ときく。ツルブ戦線（第一線距離一五〇キロ）戦況不利となり、直ちに本隊に追及命令あり、行軍行脚のはじまり。出発に際しては何時どこで果てるやも知れないから、各自別れの水盃といつても料理は限られている牛肉、魚の缶詰と衛生梱包から引き抜

いたアルコールを薄めての酒。床は丸木を並べて草を敷いた座敷、ジャングルの中で光線は通らない、昼でも薄暗い所であった。

各中隊の残留隊まともり追及行軍、何時何処で本隊に合流出来るや不明。携行食糧は減るばかり。補給の見通したたず、夕方飯盒で八分位たいた飯を一日中の食糧とせねばならぬ。副食は牛かん（小）一個にて満腹感を味わうことなし。夕方炊きたてのご飯つい食いすぎて半分食べてしまい、翌日の朝食でなくなり、昼食はカンパンを炊いて、野草の芽を入れてどろどろ汁として（調味品なし）どうにか空腹をいやし、餓えを凌ぎつつ行軍。

支給されている三八式歩兵銃、帯剣はさびて手入れ不充分。でも帯剣は貴重な道具、雑炊を作る時の包丁、一夜の宿を作るときの鉋、唯一の刃物として役目を果たしてくれた。

雨が降っても雨具はなし、ぬれたままの行進、二、三日も雨降りが続けば、川は増水し、道なき道だから橋はなし、水の引くのを待ち、時には急流を手をつな

ぎあつて渡る中、一人（野崎二等兵上海現地召集補充兵）手が離れて一〇〇メートル位流されて、一行（一〇人位）向こう側にて待ち、たどりついて来たので手を取りあい行進を続けた。

柏村二等兵（兵庫県出身、大学卒同年兵）脚気となり、どうがんばっても歩けないといいだし、それでは駄目だ、班長堀伍長（十六年徴集現役乙幹）びんたを取つての励ましも体力減退しおくれたので、仕方なく皆がカンパンを少しずつ与え、後れても絶対一人にはならぬよう（一人になれば気がゆるみ、へたばつてしまへばそれでおしまいか、土人（真黒い現地人）にどんなことされるかわからぬ）最後尾のどの部隊でもよいからついてこいといつて分かれた。

終戦後、入院患者など所属隊に復帰したが、柏村は不帰、中隊人事係より戦死扱いとさく、思えば今でも目頭が熱くなる。

行軍中、土人に出会えば「ジャバンボーイナンバーワン、アメリカナンバーテン」。道順を教えてくれたこともあり（言語は英語なまりで堀班長は旧制中卒で

判じられた）。

時には思いがけぬ餌の山に出会ったことがあった。海岸近く行進中飛行機より投下した食糧、ゴム袋入りの中に二重の袋があり、内容は内地白米、牛缶、乾燥味噌、砂糖等思いがけぬごちそう。皆が先づ背囊いっぱいにつめこみ、飯盒いっぱい銀飯を炊く（米を多く入れたので飯盒のふちより一センチ位もり上り蓋がはずれかけた）。

腹いっぱい、ほとんどそれを食いつくした、平素満腹感を味わったことなく餓鬼のごとくむさぼり食べた。

半日とて休息は許されず行軍。A地点よりB地点へ行くのに陸地を行けば二日位かかる場合、船舶工兵の大発にて沿岸を行進中、舟が南海特有の珊瑚礁に乗り上げ座礁したため、全員が海中に降り（水深一メートル余）舟を浮べて離礁、直ちに乗船、舟の位置が高くなる。

先づ一人乗り手を引張りあつて乗るや否や発進やうやくB地点に上がり、人員点検すれば二人不足、乗り



遅れてしまったが方法がなし。総て機敏な動作でなければならぬ。海岸は何時でも敵哨戒機が飛んでいた。

カライアイに到着したら後退して来た負傷兵（安井上等兵十五年現役、あご髭を長くのばしていた）に出会い、二キロ位先の川辺の小屋に高島班長が倒れていると知り、おれと寺谷上等兵と二人で救助に向かう。

負傷兵（独歩者） 後退は大体海岸の砂地より四、五メートル入った草木生地とし、草を押え道形を形成していた。川に出会えば、川の水と海水の合流点は砂が両方より押しよせられて幾らか高く浅瀬となっており、その位置を足先でさぐりながら。どうにか向こう側にとどりついた。海中は対空遮蔽物なく、哨戒機に見つけられたらおしまい、一〇〇メートル位の低空飛行しつつあり。

一時間位行った川辺に高島軍曹（十四年徴集現役、自分は未知の人）を見付けた（その付近には後退患者の作った小屋が多くあり既に死亡しているものもいた）。

くたくたに衰弱し、腕の傷口は化膿し、「ウジ」が

うようよ。治療方法は何もなく、ウジにウミを食わせての治療をしているという。

歩行不能にて二人ではどうすることも出来ず、岩本に後援者を呼んで来てくれたといわれ、一回通ったばかりの道を我にむちうち後戻り、一同一〇人余と共に高島班長のいる地点に午後三時頃たどりついた。帯剣で木を切り、かずらを取り、担架を造り、班長を搬送。道は一人歩きのせまい中で、担架搬送となれば二列行進である。いろいろの障害物をよけて歩度ものびず、夜となり、あちこちする間に方向を間違えたり、どうにか野戦救護所へ渡したころには夜明けとなった。

それから約十日後ココボ（ラバウル南方）に到着、本隊に合流した。

いよいよ（昭和十九年二月一日）転進作戦に参加。

第二大隊の行軍順序に従い、第八中隊の後に第二機関銃中隊（ツルブの戦闘にて中隊長、海崎中尉戦死。戦傷等にて当時全隊員一〇数名、先任将校金田少尉指導）の行軍が続けられた。

雨が降れば川は増水、橋とてなく、川岸の適当な木

を見付けて切り倒し橋代用にしたり、現地の木、かずらで筏を作り、かずらで紐をつけ装具を載せ、人はつかまり水泳の上手なものは向こう岸まで泳ぎ引つ張り、また引き戻しを繰り返しの行進。また、湿地帯に出会えばあたり一面洪茶色の沼地で、そこを通らねば何倍かの廻り道となるので枯木、枯枝、木の葉等を敷き、杖を持ち、先の人の足跡を踏み一歩でも間違えば服まで、いやそれ以上でも沈む底知れぬどろどろ地帯を装具を背に肩には分解した重機の部品である。

一日の行程四、五キロ、また海岸の砂浜を行けば軍靴はめり込み一メートル進めば五〇センチ後退という歩度である。敵さんの哨戒機の的となること数回。ある時小休止となり行軍の直前中隊（二機中隊は第八中隊に後続）の第八中隊所属の小椋庄市一等兵（同郷山川木地出身）と会い、手を取りあつて共に元気を出して頑張ろうと誓いあつたが、数日後訪ねたら見当らず、戦友に聞いたら落後したとのこと、戦死者となつてしまつた。

ある日、数回のスコールに会い衣服がドロドロとな

り、宿営地に着き小隊長（軽部少尉の当番をしていた）の巻脚絆を洗いに水を探して洗っている内に、次第に暗くなりかけたので急いで用をすませ帰らかけたが、ジャングルの中は数分前に来た方向が判らぬようになり、焦ればよけいに変な方向の崖にぶつかつたり、全く暗くなつてしまつた。進退極まり大樹の根元にへばり込んでしまつた。不安と恐怖におののいていたが、心身疲れており、何時かとうとうと眠つてしまひ、はつと気がついたら夜が明けかけていた。

僅か数十メートルの所に中隊の野営地。帰つたら皆が心配していたが無事を喜んでくれた。

かくして中隊合流より約三ヵ月、ほとんど毎日行軍にて、海岸には波に打ち上げられた死体が全裸となり、膨れ上がり、目鼻からうようよ、異臭ただよい目を蔽うばかり、また既に白骨化しているものもある。一度倒れたらこのようになる、誰も助けてくれない、いや助けることが出来ないのだ。何時も我と我が身に鞭打ち頑張つた。

足は川を渡つても靴の中の水を出すことができず、

ぐちゃぐちゃ。ズボンは巻脚絆の上脛の内側の縫い目を五センチ位切り、川から上がった時に早く水が出るようにしていた。食事とてろくなものでないので、脚気にかかり足が腫れて靴がはけないようになり、跣(軍足のみ)で歩いたことも。

数日後、二日間の小休止となり、衛生兵に注射を打ってもらい、腫れが引き、どうにか落後をまぬかれた。行軍中は体を洗うようなことは全然不能で、不潔そのもの。たむしとなり、馬用のヨーチンをつけたらやけどとなり、股の内側がただれ、歩行に随分苦労したこともあった。

昭和十九年四月二十五日、長行軍の末、富士見台(連隊本部所在地)に到着、二日後、西貿易店に移駐第六師団(熊本)将兵の転属により部隊は再編成された。六師団員の転属とはいうもののツルブ戦線より転進して来た、われら第五十三部隊の兵員の方が、はるかに少なく、すべての行動の主役は元第六師団の兵員のものであった。

九州弁はなまりが多く荒っぽく、行動も特に敏捷、

古い兵隊(七、八年勤務)が多く、当分はとまどった。

約一ヵ月後タビロに移駐、第二小隊(小隊長長谷川曹長)所属となり、中隊指揮班より一〇〇メートルの所に宿舎を作り、専ら農耕、物資収集(パイヤ、バナナ、カボチャ、カボチャのつるの芽、サツマイモ、同つるの芽、川エビ、タビオカ、タロイモ、ジャングルイモ、カエル捕り、カエルのもも肉のから揚げ、栄養失調防止策として軍医部より奨めていた)など食糧確保につとめた。

休日には小隊の裏の椰子林にボタンインコ鳥打ち、三八式単発銃でもたまには命中することあり。

郷原台(二大隊本部所在地)の下に第二機関銃の厩があり、軍馬が三頭飼育されている。新川二等兵(自分より後輩、沖繩出身)と二人当番勤務した。毎日馬の手入れ(そっこう、蹄洗、蹄油、飼付(野草と圧縮馬糧、草刈り)近くに川あり、たまには「パイヤ、パイヤ」(火をたいて食うものを作ること、兵隊語か)をしたり、ゆっくりり過ごした。

それから二ヵ月後、陣地構築隊勤務となり、三交替

で二十四時間作業。重砲陣地の壕掘り、高さ二メートル、巾一メートルの穴を、一交替に一メートル掘り（トロッコ使用）棒を組み、三方に板をはめて終わり。皆が（一組十名位だったと思う）一生懸命にやり、早く終わって宿舎で休養した。頭髮は伸びてもバリカンはなく、戦友剃刀でそりあった。伸びかけた時、蚊帳の出入りにひっかかること。

連隊本部と大隊本部等の連絡用としての通信壕（深さ一メートル、巾八〇センチ）掘り作業、一人一〇メートルづつ割当てられた。スコップは現地調達のドラム缶を切って作ったもので切れ味悪く、土が離れない。木の根等に当たれば随分てこずったが互いに協力しあい作業をやった。

わが第二小隊はケラバットの第五中隊配属となり移駐した。ジャングル内に宿舎、防空壕を作った。マラリヤによる熱発者多く、古い兵隊の熱発に当たっては、梅漬けの樽二個の、上の樽より水をパイプで出し額にあて、下の樽に受け、その水をすくって上の樽に汲み替えの使役などした。

漁労班の水牛捕獲に際しては四本足のみ持ち帰り、海岸より一キロの道を穴を開けて棒を通し一本の足を二人がかりで運ぶ。中々重かった。あらゆる方法を考え兵員の栄養失調の防止策を講じた。

大隊本部勤務となり連隊本部へ命令受領、農耕、食事当番など。マラリヤにて休養室に入室の時に軍旗祭があり、久方振りに銀飯（米の飯）が上り、戦友が持つてきてくれた。食欲はあまりなかったが無理に食べたら十分後には全部上げてしまった。マラリヤ入室二十日余りとなり軍医に野戦病院に入院しないと度々いわれたが頑張っている内に次第に菌がへり（耳たばより採血検査する）入院は免れた。七〇〜八〇%の者が入院経験者だった。

ある日ワニ（体長三メートル）を捕獲して来た。調味品はなかったが珍しい動物食で大変美味しく食べた。

昭和二十年八月十七日、大隊長の全員集合がかり、舎前に整列、戦争は終わった。昨日より飛行機が飛んだらうとのこと。考えて見れば何時も二機づつ飛ん

でいた哨戒機の姿はなかった。真偽を疑ったり、七分三分か（わが有利）、半々か、なあなど噂していたが、三日たち五日後には広島に特殊爆弾投下により無条件降伏敗戦となったことが判明した。武装解除、将校連の長刀も薪を束ねたごとく扱われた。

大隊本部の福田曹長と富士見台の連隊本部に功績上申の書類作りに行き、三日目の夜中大隊本部に伝令あり、帰隊命令にて暗夜一人帰隊中、第二機関銃中隊（原隊）の軽部少尉他一人に出会う。要旨を告げると気をつけて行くと励まされ、行進中海岸に出たら波の音が右に聞こえねばならぬのに左に気付き、約五〇〇メートル位タウンして夜明け頃、田広の第二機関銃中隊の横を通ったら炊事場では火を炊いていた、郷原台の大隊本部に到着報告した。

間もなく大隊本部勤務解除、中隊へ復帰したら西崎海岸への移駐準備に大童。宿舎建築材料の伐採運搬と大工経験者の指導により砂浜に宿舎を作り一応落ち着いた。

終戦後は現地人の態度一変し、「ジャパンボーイナ

ンバテン」等と罵り、宿舎を襲撃することがあるので、椰子の木で木刀を作り持っていた。

十月十日頃より進駐軍（蒙軍）の使役の要求があり、初めは中隊より四、五名だったが日を追うに随い、その数を増し、十七日ころにはほとんど全員となった。作業は広範囲にわたり、ジャングルの伐採、幕舎建築、道路作業、揚陸作業、病院の雑役（看護婦のズロースの洗濯までしたとの笑話あり）など手先仕事は一切日本兵にやらせた。

給与関係ゼロで昼食の弁当はサツマイモ二、三個、飯盒に入れて携行、昼食時には飯盒でカンパンを炊き、野草を入れて量をふやしどうにか満腹感を得ていた。

揚陸作業は海岸に照明をつけ、三交替二十四時間作業、沖合に停泊している貨物船より起重機で小舟に降ろし、日本兵が整理し、浜辺に着けば、日本兵が肩で担ぎ種類別に整理、監視が自動小銃を持ち巡回していた。

入浴設備はなく海水につかり、終わりにドラム缶の水（砂浜にドラム缶に穴をあけて埋めて塩分を取る）

で洗った。

その頃進駐軍の命令により佐官以下大体一万人単位の集団生活が始まった（将官は別に集団、将官部落と称し日本兵の当番付）。われらは第五集団、赤根地区（赤根集団）へ移転、休養時には環境の整理、たまには娯楽会、歌謡曲、安来節、時代劇、映画（映画はフィルム二、三本にて何時も同じ画面）などにより精神の沈滞を防止された。片時も忘れられざる軍人勅諭も書き替えられ、困難時聖諭奉誦五訓、剛部隊長、

一つ軍人は忠節を尽くすを本分とすべし。

吾等は、承諾必謹、君国復興の途に忠節の誠をい  
たし萬古国民の精髓たらんとす。

一つ軍人は礼儀を正しくすべし。

吾等は言行を慎み肅然たる礼節を保ち他をして自  
ら敬拝せしむるに至らしめんとす。

一つ軍人は武勇を尚ぶべし

吾等は忍辱の大勇猛心を發揮し国体護持の聖旨に

副い奉らんとす。

一つ軍人は信義を重んずべし。

吾等は千辛万苦自制能く協定を履行し以て祖国同胞の福祉を増進せんとす。

一つ軍人は質素を旨とすべし。

吾等は粗衣、粗食、現地自治に励み復興参加の時  
至るまで断じて健康を保持せんとす。

〔朗吟〕

うきことの 尚この上につもれかし

限りある身の 力ためさん

以上を毎朝食事前に朗誦させられた。

いろいろのデマがとび復員は何日頃だそうな、また  
は復員どころかアメリカに連行し奴隷として一生酷使  
するそうな。また船に乗せて太平洋の真中で沈めてし  
まうとか。

昭和二十一年四月中旬、石田准尉の復員命令の伝達  
があつても疑っていたが乗船のため南崎へ移転とな  
り、復員準備に大童。きちんとした背囊などほとんど  
無く、各自工夫して背負袋のようなものを作り、荷物  
をまとめ四月下旬、「さらばラバウルよまた来るまで  
は」と別れを告げ、米国の貨物船に乗り一路故国へ。

船足の遅いこと。

十日余りで、夜明け頃豊後水道を通り、四国の山々や近くに点々と漁船を認め、本当に日本へ帰ったと思つた。

五月五日大竹に入港、運搬船にて上陸。元海兵団兵舎に入り、検疫、手続きを終え、現金二〇〇円、一〇円の新札で支給され、相当な金額だと思つたが、一步町へ出て見たらびつくり米糠で作つたような饅頭一個一五円。復員列車（乗車券は行先、経路記載なし）にて夜中乗換えにて広島に下車、あたり一面焼野原、假小屋のような駅舎があつただけ、原爆の物凄さをまざまざと見せつけられた。

同年兵の富田勝雄と二人、伯耆大山駅で乗り換える際、駅前の民家に依頼し、復員用に支給された米と牛缶で飯を炊き食いかけたが、何だか落ち着かず。早く家に帰りたい気持ちとなり、次ぎの上り列車で赤碕駅下車、踏切の近くの岩本伝藏氏宅に着き、初めて親戚知人に会つた。皆がびつくりして喜んで迎えてくれ、早速、自宅に電話してくれた。荷物は川上三藏氏の馬

車に乗せて貰い、徒歩で分乗寺まで帰つたら、父が出て来た。感極まり何から話してよいやら言葉がなかつた。

五月七日午後三時頃家に着き落ちついた。日本の土地を離れてより二年七ヵ月。互いに音信不通だった空をどうして埋めてよいかわからなかつた。

民族の闘争ともいふべき戦争が如何にみじめなものかしみじみ再確認する昨今。七十歳を数えることとなり、朝早く目がさめいろいろ追憶しつつ、この記録を思いつき、約一ヵ月、朝二時、三時頃より寢床の中でスタンドの明かりで、追想しながら、休んだりまたはじめたり、歩兵第五十三連隊誌などによりようやくここまで書いた。

記憶力は確かな者ではないが、これまで回想できたということは当時の苦勞が骨髓まで染み込んでいたためだと我ながら思われる。

戦後四十年の歳月の流れた今日、絵てが変貌。終戦直後、百姓の一番欲しがった地下足袋一足でも部落に配給があれば配分に困り、たかたかをして決めたもの

だったが、昨今の物の流れかた、スーパーの店内何処に行つてもあふれる位の商品、何とて無いものなし、何だか未恐ろしいような気持ちを感じさせられる。

神垣に 涙手向けて 拝むらん

かえるをまちし 親も妻子も

### 【解説】

歩兵第五十三連隊（月七三八四部隊）は第十七師団隷下で、昭和十三年四月編成、七月十四日軍旗を拝授し編成を完了した。初代連隊長は陸軍大佐坂本末造である。

中支に進駐し、同十月一日～十二月六日まで武漢攻略戦、昭和十五年錢塘江南岸作戦、漢水作戦、昭和十六年豫南作戦、大湖西方作戦、第二次魯南剿共作戦、昭和十七年第十三軍指揮下に復帰。昭和十八年蘇淮作戦、六塘河作戦。

昭和十八年九月上海附近警備。九月～十一月ニューブリテン島、九月二十四日～昭和十九年四月二十八日第二次ビスマルク作戦。昭和十八年十二月～昭和十九年二月二十四日ツルブ作戦。（両作戦参加）

昭和十九年二月～四月二十八日カ号作戦。四月二十九日～十月三十一日、第三次ビスマルク作戦。十一月一日～昭和二十年四月十四日、第四次ビスマルク作戦。四月十六日～八月十四日、第五次ビスマルク作戦。

復員、終戦後、濠軍監督のもとに集団宿営を命ぜられ赤根において集団宿営。昭和二十一年三月下旬、第三大隊より復員開始。五月中旬復員輸送完了し解隊す。以上が部隊の極めて簡単な略歴である。

次に南方ニューブリテン島において第十七軍隷下の状況を概説する。

昭和十八年十月発令した第八方面軍持久作戦計画の兵力運用の3に、第十七軍（第六師団、南海第四守備隊、第十七師団の歩兵四大隊及び砲兵一大隊基幹）はボーゲンビル島の要地を確保し・・・。4. 第十七師団（歩兵四大隊、砲兵一大隊欠）は現に中西部ニューブリテンに配置せられあるが、ガスマタ守備隊及び松田隊を併せ指揮し、主力をもってマーカス岬以西のニューブリテン島の要地一部をもってガスマタを確保し、来攻する敵を撃破して持久を策する。とあり、師



団の任務は決定した。

ボーゲンビル島に増加予定の師団の四大隊は北部ブカ島に二大隊到着したが、敵はブ島に上陸した。方面軍は逆上陸のため、ニューブリテン使用予定の一大隊を抽出、十一月六日夜上陸を執行したが、上陸地点が敵より離れたため成果には見るべきものがなかった。しかし、結論的にはボーゲンビル島への艦艇輸送も不可能になり、同島は無力化した。(墓島と称す)

ダムビル海峡東岸の防備について。十二月十五日、敵のマーカス岬上陸時の西部ニューブリテンの防衛は、主として第十七師団が当たっていた。執筆者・岩本氏の手記にあるごとく、第十七師団兵力は十一月上中旬の間、海軍艦艇及び大発等によってラバウルより西部ニューブリテンに前進し、十二月十五日、概ね次の如く配備された。

1. 歩兵第八十一連隊の約一大隊、マーカス岬へ到着せんとしていた。

2. ニューブリテン西岸の防衛は、松田巖支隊長指揮する第六十五旅団(歩兵第一四〇連隊基幹)、歩兵

第五十三連隊主力、砲兵一大隊、捜査第五十一連隊等がツルブ、ブッシング、西端対岸のウムボイ島を防御していた。ツルブには飛行場があり、防備の重点とされていた。

3. 歩兵第五十四連隊は一大隊のほか第三十八師団(沼)の歩兵及び砲兵各一大隊を指揮し、ガスマタ(スルミ)の守備に当たった。

十二月二十六日、敵はニューブリテン西端ツルブに陸続として上陸し、松田支隊は水際に迎撃したが、遂に撤退、地上戦に移った。しかし一月中旬以降、致命的な弾薬欠乏が訪れた。

方面軍は二十年一月二十日西部ニューブリテンの確保を断念し、第十七師団に対し、ツルブ附近の兵力を中部方面に撤収し、爾今概ねタラヒア及びガスマタ附近の要域において来攻する敵を撃破して極力持久を策すべし、と命じ、松田支隊は一月二十三日、東方に向かい後退を開始し、西部ニューブリテンは敵手に陥ちた。

二月十七、八日、敵機動部隊はトラック群島に対し

て大空襲を敢行、トラック島の在泊艦艇船及び陸上諸施設は多大の損害を被わり、第五十二師団（柏）の輸送船団も二隻沈没、兵員一、一〇〇名戦死し、トラック基地にラバウル航空兵力は転用され、二十日以降、ラバウルには一機の海軍機も存在せず、その戦略的価値の大部を失ってしまった。

ラバウルが孤立し、我が軍（国）の前線は完全に崩壊し、ラバウル地区は終戦まで、現地自活、地下要塞により長期持久準備が始まり、ニューアイルランド島地区と併せ、孤立した兵力は陸軍（第十七、第三十八師団基幹）約七万五千（含む労務者）、海軍約四万名となった。この地域での損失は陸軍約九万、海軍約四万名（昭和十九年二月頃まで）である。

昭和二十年二月、第八方面軍、今村均軍司令官は命令を自ら起草し、

「1. 方面軍將兵の共通一貫の根本任務は、一人十殺、以て敵戦力を破砕するにあり。2. 敵の来攻に際しては果敢に反撃し、これを撃砕すべし。第十七軍に要域確保の任務なし。3. . . 戦闘行動に入れる軍隊

及將兵は断じて後退することなく其の戦場を死所となし、以て悠久の大義に生きるべし。4. . . 負傷せる戦友の介護は許さず又負傷者の戦線より後退は軍法に問はるべきものとす」という必死敢闘のみであった。

これに基づき、第十七師団、第三十八師団を基幹としてラバウル周辺において、蒙古撃退の文永・弘安の役の再現に満々たる自信を固めつつあった時終戦となった。ラバウル直接地区及び外郭防衛線たるニューアイルランド島には陸海軍十万三千名が残り、ラバウル沖の濠軍巡洋艦上で降伏した。